



いま、私たち人間を含む生物の生存環境は、大変な「危機」的状况にあるとされ、「ローマクラブ」の宣言以来数多くの対案や提言が行われて世界的規模での合意形成がはかられてきている。しかし、

その根源的な解決を見るに足る説得力をもった方策は、手にしていない状況である。

このような現状に対し、解決案となる根本的な認識論と哲学論とも言える提言をまとめたものが本書である。それは、「根井哲学」とも言える346頁に及ぶ大作である。そして、それは、「新しい文明論」の論述として見ることができる。

本書は、現代の自然科学・社会科学・人間科学・哲学などの成果を総合して、根源的な新しい世界認識と歴史認識により、地球の生態系や全自然と調和しうるこれからの新しい地球文明の基本的構図を提示することを目的としたものであると著者は述べている。従って、その論述は極めて広く、宇宙史から始まり、地球史・生物史・人類史にまで及び、これまでの文明論から科学技術論・進化論・エントロピー論・環境論等の総合とそれの統一化に向かうための方法論を説き、まとめとして、「新しい地球文明の創出へ」向かっての「根井哲学」が情熱を込めて述べられている。

本書の総論は、第1章「近代文明の根本矛盾とその克服の方向性」で述べられ、これを導くための各論的部分が、第2章以下第4章までで展開している。これまでの諸科学とその技術の発展過程が細密に論じられ、著者独特の「概念言語」が随所に登場し、論述に深みをもたせている。また、各章ごとに「補注」が付され、該当箇所の参考になる関連類書の紹介と寸評があり、全体として研究書の態を持ち大変勉強にもなり説得力がある。

最終章(第5章)の「新しい地球文明の創出へ」において、「文明系と生態系の調和を実現する技術体系」、「内発的発展を可能とする新しい地球文明」、「新しい文明の創出へ向うローカル＝グローバルな動き」の3つのテーマに集約しての提案は、総論的部分の補強展開として明解である。

最後に本書の特徴的と思われる記述部分を紹介して、多くの方々が、本書を手にし、これからの人類の生存について考えて下さるよう願う。

①「人間は、生態系と文明系という二つのシステムに属しており、意識的生命活動によって、生態系における物質エネルギー循環と文明系における物質循環を媒介・統一して、創造的エネルギーを形成していく」(6頁)

②「宇宙の誕生以来、熱力学の第二法則に抗して、進化発展してきた創造的エネルギーは、人類史においては、自然の諸力と人間の諸能力とが根源的に統一された歴史的生命の流れを形成する。歴史的生命の世界は、人間の認識を媒介として自覚し、自己を組織化していく。近代文明は、この歴史的生命が最も高次に組織化されたシステムとすることができる。(21頁)

③「人類が、その近代文明系における生体外物質代謝を有効に制御するだけの情報処理能力を獲得していない」(同)

④「現在の地球環境の危機は、人類がなお、完全な生体外進化を遂げきっておらず、環境との完全な適応を実現していないことの現われである。そこに、文明の危機があるとともに、人類のさらなる発展の可能性が存する」(22頁)

⑤「人類の新しい文明の創出には、これまでの情報体系の根本的再編が必要であり、生態系と文明系の二つの開放システムを媒介・統一していくという世界と人間の根源的關係についての自覚が必要である」・「この認識により、近代科学技術文明と生態系との対立を根本的克服することが可能となる」(23頁)等々、私もじっくり考えたい。